

**製品名: Nek9 (リン酸化 Thr210) ウサギポリクローナル抗体****カタログ番号: APRab05072**

研究使用のみ

**概要**

説明	ウサギポリクローナル抗体
宿主	うさぎ
応用	WB,IHC,ICC/IF,ELISA
反応性	ヒト、マウス、ラット
標識	非共役
修飾	リン酸化
アイソタイプ	IgG
クローン性	ポリクローナル
形態	液体
濃度	1mg/ml
保存	アリコートし、-20°Cで保存してください（12 ヶ月有効）。凍結/融解サイクルを避けてください。
輸送	氷袋
バッファー	50% グリセロール、0.5% 保護タンパク質、0.02% 新タイプ防腐剤 N を含む PBS 液。
精製	アフィニティー精製

**応用**

希釈倍率	WB 1:500-1:2000,IHC 1:100-1:300,ICC/IF 1:200-1:1000,ELISA 1:10000-1:20000
分子量	110kDa

**抗原情報**

遺伝子名	NEK9
別名	NEK9; KIAA1995; NEK8; NERCC; Serine/threonine-protein kinase Nek9; Nercc1 kinase; Never in mitosis A-related kinase 9; NimA-related protein kinase 9; NimA-related kinase 8; Nek8
遺伝子 ID	91754.0
SwissProt ID	Q8TD19
免疫原	抗血清は、Thr210 のリン酸化部位周辺のヒト NEK9 由来の合成ペプチドに対して作製された。アミノ酸範囲: 176-225

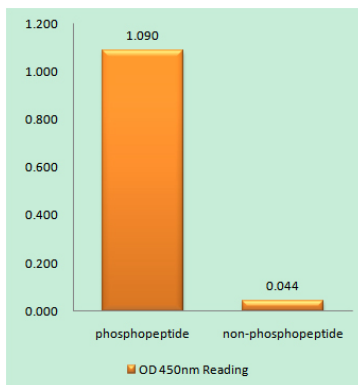
**背景**

この遺伝子は、セリン/スレオニンプロテインキナーゼの NimA (有糸分裂 A 期には決して活性化しない) ファミリーのメンバーをコードしています。コードされているタンパク質は有糸分裂で活性化され、次に有糸分裂中に他のファミリーメンバーを活性化します。このタンパク質はまた、間期の進行に不可欠な細胞プロセスを媒介します。[RefSeq 提供、2016 年 7 月],触媒活性: ATP + タンパク質 = ADP + リン酸化タンパク質。補因子: マグネシウム。発生段階: 発現は細胞周期を通じて緩やかに変化し、G1 期および定常期細胞で最も高い発現が観察されます。ドメイン: コイルドコイルドメインを介して二量体を形成します。酵素調節: 有糸分裂中に分子内自己リン酸化によって活性化されます。活性と自己リン酸化はマンガンイオン >> マグネシウムイオンによって活性化されます。洗剤濃度の上昇に敏感です。細胞周期によって制御されませんが、G0 期停止細胞では活性が高くなります。機能:有糸分裂進行の多面的制御因子であり、紡錘体のダイナミクスと染色体分離の制御に関与します。さまざまなヒストン、ミエリン塩基性タンパク質、β-カゼイン、BICD2 をリン酸化します。ヒストン H3 のセリンおよびスレオニン残基と、β-カゼインのセリン残基をリン酸化します。G1/S 遷移と S 期進行に重要です。PTM:セリンおよびスレオニン残基が自己リン酸化されます。FACT と複合すると、Thr-210 のリン酸化が著しく上昇します。有糸分裂中は、Thr-210 はリン酸化されません。in vitro で CDC2 によってリン酸化されます。類似性:タンパク質キナーゼスーパーファミリーに属します。NEK Ser/Thr タンパク質キナーゼファミリー。NIMA サブファミリー。類似性: 1 つのタンパク質キナーゼドメインを含む。類似性: 6 つの RCC1 リピートを含む。サブユニット: ホモ二量体。Ran GTPase に結合します。Ran-GTP よりも Ran-GDP に対して高い親和性を示します。NEK6、NEK7、BICD2 と相互作用します。FACT 複合体の 2 つのサブユニットである SSRP1 および SUPT16H と相互作用します。組織特異性: 心臓、肝臓、腎臓、精巣に最も多く存在します。平滑筋細胞および線維芽細胞にも発現します。

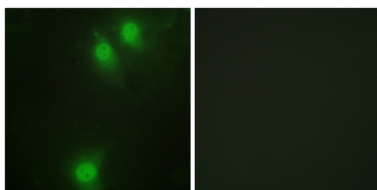
## 研究分野

細胞生物学

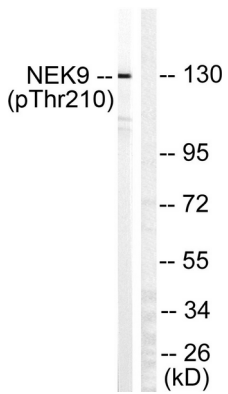
## 画像データ



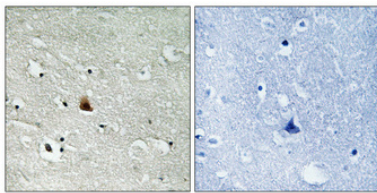
NEK9 (リン酸化 Thr210) 抗体を用いたリン酸化ペプチド (リン酸化左) および非リン酸化ペプチド (リン酸化右) 免疫原の酵素結合免疫吸着測定法 (リン酸化 ELISA)



NEK9 (リン酸化 Thr210) 抗体を用いた HeLa 細胞の免疫蛍光染色。右の写真はリン酸化ペプチドでブロッキングした画像です。



NEK9 (リン酸化 Thr210) 抗体を用いた HepG2 細胞ライセートのウェスタンブロット解析。右レーンはリン酸化ペプチドでブロッキングされている。



パラフィン包埋ヒト脳の免疫組織化学染色。抗体は 1:100 (4℃、一晚) に希釈した。抗原賦活化には、高圧高温トリス EDTA (pH8.0) を使用した。抗体から得られたネガティブコントロール (右) は、免疫原ペプチドで前処理した。